

昭和二十四年三月十五日
發行三種郵便物認可
(毎月一回・十五日發行)

(通第二一四号)

次

夢幻の人生と真実の如来

.....

近角常観.....(1)

随想断片

.....

柳瀬留治.....(4)

親のみの持つ智慧

.....

花田正夫.....(7)

目わが懺悔の記

.....

三上孝基.....(11)

二河喻と天路歷程

.....

福島政雄.....(19)

慈光

第十九卷

第三号

夢幻の人生と眞實の如来

近 角 常 観

現代の社会は夢幻の人生に執着し過ぎてゐる。否吾々凡夫として此人生に執着して居ることは昔も今も変らぬのである。ただこの人生に執着することによりて、眞實なる人生を求めんとすることは全然方角を間違えてゐる。眞實なる人生々活は、人生の夢幻なることを覺了して、初めて眞實の人生は来るのである。

否、むしろこの人生は徹頭徹尾夢幻であるが故に、これを憐れみまします如来の眞實がましますのである。人生が夢幻なるが故に眞にこれを悲愍せしませて、無明の暗夜を照らさんがために、尽十方無碍光如来が影現しましたのである。これを救済せんがために法性自然の報土を建立したもうたのである。これを化度せんがために煩惱の林に遊び、生死の園に入りて煩惱の我等を化益されることはきわまりないのである。人生は生老病死の苦海なるが故に、大悲の願船ましまして我を喚びて乗せたまうのである。大無量寿經の東方偈に曰く、

一切の法は幻おし、夢と幻と響との如しと覺了して諸の妙願を満足して必ず是の如きの刹を成ぜん。法は電と影との如しと知りて、菩薩の道を究竟し、諸の功德の本を具して、受決して当に作仏すべし、諸法の性は一切空・無我なりと通達して、専ら淨仏土を求めて、必ず是の如きの刹を成ぜん。とある。実に人生は夢であり、幻である。それを憐れみたまうが如来の眞實である。実に人生は罪惡であり、煩惱である。これを憐れみたまうが仏陀の眞實であり清淨である。人生は闇黒であり、無明である。それを照らしたまうが無碍光であり、清淨光であり、歡喜光であり、智慧光である。

実に如来は闇黒なる人生の光明である、夢幻の人生をよびさまさんがために、一如法界の境界より來現しましたる眞實大悲の父母にてましますのである。

如来は一切のために、常に慈父母となりたまえり。

当に知るべし、諸の衆生は、皆これ如来の子なり。

世尊大慈悲、衆のために苦行を修したまうことは

人の鬼魅に著せられて、狂乱所為多きが如し。

我等衆生は煩惱のために狂わされて、凡夫顛倒の所為を爲しつつあるのである。これをみそなわす如来大悲の眞實は、起きても居ても安んじたまわぬのである。仏かねてしろしめして煩惱具足の凡夫と仰せられたが、実に我等のこゝとである。そのやるせなき御心より、五劫思惟の本願をたてたもうたのである。実に五劫の思惟も兆載の修行も、ただ親鸞一人がためなりけりというは、実にこの如来大悲の眞實の親心をいだかれたる信相である。

ここに信仰問題について大に注意すべきことがある。私が罪深いために如来様に御苦勞をかける、親様に心配をかけるというて、かえつてそれがため苦しむものが多い。それは大いに方角違いである。親の苦しむのは子の苦を減じようためである、否親の苦しむというは、苦しく思うて苦しむのではない、子の苦しむのをいたわるのである。親の狂乱は子の狂乱を憐れむ心のあらわれである。それ程の親の心をいただければ、狂う心も安らぎ、煩惱の心も融けるのである。借金に苦しむ者を憐れんで、引受けてやろうという声をきいて、その親切に対してすまぬというて苦しむ者

があつたならば、それは借金を引受けて貰うたのではない、かえつて恩誼や人情につまされて苦しむのである。如何に借金が多少ろうとも、如何に煩惱熾盛にても、皆これ狂乱の所為なりとて、飽くまで憐れみたまうが如来大悲の眞實である。この眞實をいただくが眞宗である、即ち念仏成仏これ眞宗である。

若し少しでも自ら清くすることによつて、自ら眞實にすることによつて、自ら断惡修善することによつて、如来の御心に協わんと思ふならば、それは不可能である。万行諸善の仮門である。人生は唯夢である、幻である、そらごとたわごとである、火宅無常である、煩惱具足である、ただ念仏のみぞまことである。

念仏成仏是眞宗 万行諸善是仮門

眞實、權假をわかずして 自然の淨土をえぞしらぬ
吾等の期するところは自然の淨土である

五濁惡世のわれらこそ 金剛の信心ばかりにて
ながく生死をすてはてて 自然の淨土にいたるなれ

信は願より生ずれば 念仏成仏自然なり

自然はすなわち報土なり 証大涅槃うたがわす

唯々やるせなき如来眞實の本願力自然にひかれて、念仏成仏自然にいただくが、如来廻向の御力である。かくて自然の淨土に往生して自然のさとりをひろくのである。

歎異鈔に曰く、

『口には願力をたのみたてまつるといいて、心にはさこそ悪人をたすけんという願不思議にましますというとも、さすがよからんものをこそ、たすけたまわんずれとおもうほどに、願力をうたがい、他力をたのみまいらするところかけて、辺地の生をうけんこと、もともなげきおもいたまうべきことなり。』

信心さだまりなば、往生は弥陀にまかせまいらせてすることなれば、わがはからいなるべからず、わろからんにつけても、いよいよ願力をあおぎまいらせば、自然のことわりにて柔和忍辱のころもいでくべし。すべて往生にはかしこきおもいを具せずして、ただほれぼれと弥陀の御恩の深重なることをつねにおもいいだしまいらすべし、しかれば念仏も申されそうろう。これ自然なりわがはからわざるを自然とはもうすなり。これすなわち他力にてまします』

本願力も自然である、信心開發も自然である、念仏成仏も自然である、柔和忍辱も自然である、火宅の利益も自然である、往生も自然である、浄土も自然である、さとりも自然である、浄土の厳莊も自然である。自然快樂の音声である。自然の徳風が念仏念法念僧の声をなすのである、唯仏与仏の智見である、虚無之身、無極体である、畢竟逍遙として有無を離るるのである。自然に還相廻向の利益があ

随想断片

ふるさとを持つよろこび

ふるさとというものは己を育ててくれた風土で、自身の母とも母胎ともいふべきものです。幼時従順にした母にも自主性が強くなつてくると反抗するように、成人すると郷土に反抗し捨てる者が出来る。だが一応世間の苦汁をなめるとはじめて故郷の有難味が判つて来る。特に老いたり病身になると回顧的になり、望郷の念がしきりに起こつてくる。

世に故郷をもたない人がある、持つていても実感の伴わない人、父が官吏でしばしば転任したもの、前には軍人の子弟に多かつた。又大都市である東京や大阪などでは故郷といったしみじみした実感はなく、所謂コスモポリタンのであつて心が土に深い根をもつていない。

涯しない大洋を行く船に港という憩い場がある。社会の荒波に曝される生活には家庭も憩いの場に違いないが、自身を培い育ててくれた郷土というものはどれだけか心の憩

らわれるのである。覚めたる者は眠れるものを呼び覚まさずには居られぬのである。醒めたるものは酔えるものを憐れまずには居られぬのである。

『弥陀の願船に乗じて、生死の苦海をわたり、報土の岸につきぬるものなれば、煩惱の黒雲はやくはれ、法性の覺月すみやかにあらわれて、尽十方無碍の光明に一味にして、一切衆生を利益する』こと釈尊の如くにして、自由自在に蘭林遊戲の徳を修すること自然である。これ実に五濁惡時惡世界中において、本願円頓一乘のますます顕現する所以である。

和讃に曰く。

南無阿弥陀仏の廻向の 恩徳広大不思議にて
往相廻向の利益には、還相廻向に廻入せり

往相廻向の大悲より 還相廻向の大悲をう

如来の廻向なかりせば 浄土の菩提はいかがせん

弥陀観音大勢至 大願の船に乗じてぞ

生死の海にうかみつ 有情をよぼうてのせたまう

これ夢幻の人生中において、如来真実の大海より化現して、一念および一時に無垢莊嚴光を放ちて、益物度生（我等を済度して下さる）したもう恩徳である。

柳瀬留治

い場になるだろう。人間の知能の無限、文化の無限を遂つている人間は、土から生れた者たるを忘れてゐる。それでルソーは「自然に帰れ」と呼びかけた。近代科学、宇宙征服にのぼせあがつてゐる人々も、人間は土を離れて生きられないものたることを知るべきです。

働くという活動に必ず憩いがなくては生きられない。憩いは働く力の源泉であつて、心の憩い所は郷土です。啄木にも故郷を憶う歌が可成りあり、歌謡曲でも「誰か故郷を想わざる」と霧島昇がよく歌つた。中国の詩に故郷を憶う作が沢山ある

子夜歌 李煜

人生 愁恨 何ぞ能く免れん

銷魂す独り我のみ情何を限りあらん

故国 夢に重ねて帰る

覚め来つて雙淚重る

高樓 誰とともに上らん

長に記す 秋晴の望め
往事 已に空と成り
還 一夢の中の如し

△大意▽

人生の愁は免れ難い。思い廻らすと心が溶けん許りだ。もう帰る望みのない故郷をまたしても夢に見、両眼の涙がこぼれ落ちる。

今は伴う人なく高樓に上り、過ぎた日の秋晴れの眺めが忘れられず、過ぎた生涯が空しくなり果て、思えば夢の中にある心地がする。

と長嘆している。又。賀知章に

少小にして郷を離れ、老大にして回る

郷音改まる無く鬢毛摧く

兒童相見て相識らず

笑つて問う客は何れの処より来ると。

△大意▽

体の小い少年の頃故郷を離れ、大く老いて帰つて見ると故郷の訛りが慕しいが、髪が薄くなつていて、路上の子供達も知る者がなく、傍に来て笑つて問う、おじさん何処から来たんだね、と。

この詩篇が何と我々の望郷の情をあらわしていることでしょう。私も最近幾度か郷土に帰り、残っている人々に逢う

人は幸福をねがう。それは内に対してのものと、外に対してのものとの違いはあつても幸福という一点には違ひがない。大方の若い年代は外に対して要望し、外境の好転を欲するようです。生活の基本条件は衣食が元だからで、物資が豊かで氣候風土に恵まれた国の人達が幸福だと見られる。

学校でも、官庁会社その他の場での成績といい、業績というものは、実は内の物であるが、多くは外に対する目的になつてゐる。達人聖者でない者は無目的にはなれない。物的に豊かになつて人生を享樂したいのが本念のようです。地位が上り名を得、人が大事にしてくれることにあるようです。女性達にしても流行の衣裳を着て顔を引立てさせ他を凌ぎ、そしてよい人を得て素晴しく楽しい家庭をと思ふようです。

処が、私の親しい人に、外からは如何にも幸福だと見られるが、内心満ち足らず過している方がある。人間の欲求というものは、一を得れば二、十を得れば百を望むものです。

東洋では古来、幸福とは「足るを知る」にある。足るを知るにはまず「己を知る」ことだと言われている。己がどれだけの能力があり価値があるかが判り、己の分が知られて、初めて沁々と幸福感が湧いてくるものです。巨万の財

た。が、もう顔を忘れて「あんた誰だつたね」と聞き、漸く思い出す。思い出すとフィルムを繰るように慕しい数々が浮び出てくる。又草刈に来た猿倉山、そこに立ち神通川を目で辿る遠い飛驒の山々。目を転ずると立山連峰、遠く富山灣、すべてが私を育ててくれた懐しいもの。ふるさとを持つ喜びに満たし、私を感慨の深い森に引き入れるので

す。そして現実のこのふるさとから、更に永遠のふるさとに想いをおよぼすのです。永遠のふるさととは宗教です。これによつて懐しい人々も親しい祖々との繋がりも生きて来て現実のふるさとが、悠久のふるさととなり、はかない人間の一生が、永遠の生につながるのです。

幸福とは

人ありて一億万年今日といえは同じ願いを立てつづけけん

人が發生して一億年、新年今日だといつて同じ願望を立て続けたことであろう。年初に人々の希うことは、健やかに幸福に、といったことだろう。更に外に対して、景気がよくなつてとか、社会環境がよくなつて過しよいように、会社が盛んになり地位給与もよくなつてとか、親たど子が立派になつて己の老後を大事にしてくれるようになどねがうであろう。

があつてなお貧る者は貧乏人な訳です。

幸福とは外的な尺度によつて決められるものではない。内が満たされているか否かにあるものです。美人に八等身という定義があり、目元パツチリ鼻高く、とも云うが、美を鼻にかけた美人は真平だ。美ならざるも内に深いものを持つ人はおのずと香氣あり床しいものである。

今私は幸福は己の内なるものだといつた。これを押し進めると人格ということになり、己を攻め、正しく立派なものにするという風にも考えられる。だがいくら己を打ち叩いても無から有は生じない。そこに人間の限界がある。結局、己の限界はこれで終りだ、と知る、そこにある。

涯しない夢、欲望をもつものの、限界の底が知れると宗教より他に生きようが無くなる。望みを果たしたいが、この能力では果たせない。その遣る方ない悲しみを汲みとり、その己をすくいあげられ、初めてああそうだったと満たされないう空虚になみなみと満たされるもの。これを措いて真の幸福はまたとないであろう。矢張り幸福は内的なものです。

(短歌草原、巻頭言)

親のみの持つ智慧

花 田 正 夫

私は子がありませんから「子を持つて知る親の恩」という世界は永遠の彼方にありますが、それでも親はありました。その親も、その膝下に居た頃の親。故郷を離れてからの親、又親を亡くしてのちの親、亡き親の年を迎えて見る親と、私の心にうつる親は段々変つて来ました。それは遠ざかれば疎んじ、離れれば忘れて行く世の常の鉄則に逆行して、恰も夕陽が西に沈んであたりが暗くなればなるほど夜空に月光が輝きを増すように、遠ざかれば遠ざかる程、離れば離れるほどいよいよ大きく強く親の姿が浮かび出るようになりました。

そして最近になつて、ことに親のみの持つ智慧ということを考えさせられるのであります。それは親が色々な人生経験をしてそこに生活の智慧を持つているというようなこととでなしに、子を持つことによつて自然に親に宿る智慧の輝きで、貧富、智愚、男女の区別なく、あらゆる親に恵まれるものであります。

ます。そこに親の智慧が見られます。

二、孔子の「孝」について

儒教に「孝は百行の本なり」とありますが、私共の年頃の者には耳馴れたおしえであります。この「孝」とは、八老十子「孝」で、老人の心と子の心とが一つにとけたところであります。こんな心は子は持ち合せません、子からは何時までも親と子が二つであります。親と子が二つにして一つなる心とは、子を持つ親のみに恵まれる心で、この親心の倦まずたゆまぬ働きかけが子に滲透して子心をおこさせ、親のふところやがて子を帰らしめるのであります。

孔夫子の教を身をもつてうけられた中江藤樹先生の言葉に「親子の親は万象の本なり」とありますのはそこを明らかに示されたものであります。「親子の親」とは子を持つ親の心で、そこに親の智慧が宿りかがやき、やがて子を育て、地上をうるおす淵源となるのであります。

親と子を二つならべて、親はかくあるべし、子たるものはかくあるべし、というようなものではありません。そうした修身や道徳を私共は多く聞かされて来ましたが、それは枝末のことで、生命の抜けた形骸であります。

然し、小鳥が卵をあたため、雛をはぐくむ姿を微笑をもつて見られた人であれば、この二つにして一つになる心の智慧こそは、生きとして生ける者、ことに我等の社会に、

一、小鳥の親

私は今も文鳥を飼つておりますが、学生時代にも小鳥を飼つておりました。その雛を育てる様子を観察しておりますと、先ず卵を産むと懸命にあたため、やがて雛になると餌をやわらかくして与え、外敵から護り、寒さを防ぎ、時が来ると巧みに巣立ちをさせるなど、寸時のたゆみなく一心不乱に育てあげて行きます。

人間の世界に乳児死亡率の高いのに、小鳥には書物もなく、医師も産婆もないのに、立派な巣を造り、見事に育てて行く力は何処から出るのでしょうか？それは卵が出来ると卵に要る巣と温かみが親鳥に要るものとなり、雛が出来ると即時に雛になくはならぬ食餌が親になくはならぬものとなる、即ち、親と子は二つであつて一つ、一つであつて二つと申す外はありません。卵をのけて親はなくなり、雛をのけてまた親はなくなる、そのものになりきる心、そこにあらゆる親の活動があらわれているのであり

絶えざる光りとあたたかみをそこから放たれているし、若しこの心が地上から見失われたならば、荒涼たる砂漠の暗夜となることもうなずいて下さるでしょう。

幸に、子を持つ親の胸には、この尊いかけがえのない智慧が宿されていて、子が如何にそむき、如何にさからい、そして知らなくても、そういう一切の障りをこえて絶えず湧き出る泉のように、又踏まれても、折られてもまた芽生え出る雑草のように、不思議な働きがあります。

それは人間が作つた制度とか、修養といったものでなく子を持つ親に自然に湧き出る心であります。但し、その心が具体的に親から発動する時、親は自分の其時其場に最善と思う形式をもつてあらわれますが、大切なのはその外形ではなくて内容であります。

有名な大岡越前守の裁判に、子を争う二人の女が訴え出た時、子供の手を一人ずつ握らせ、両方で引張り合いをさせた時、子供の痛がるのを見かねて生みの親がはやく手を放した、という逸話も、子の身になる親と自分だけを押し立てる他人の差を名判官が見抜いていた例であります。私共は形でなくその奥にひそむ尊いものをおしえられます。

三、菩薩の同事の行

菩薩とは、仏のさとりを求めて自利と利他の行を實踐する方であります。そこに布施・持戒・忍辱・精進・禪定・

智慧の六つの行を完うして、一切の衆生を成仏せしめ、自らの煩惱を断ち、無数の法門をきわめて、無上のさとりを願う人であります。かくて鳥飛んで跡を濁さぬように、あらゆる善を積みながらそれをほこらず、一切は夢幻であり電影の如しと知つて、しかも「同事の行」を行じるのであります。同事とは、病人に向うと病人になりきり、老人に向うと老人になり、智慧をへだてず、貧富をえらばず、相手に同じて行くのであります。もとよりそれは自分のひとりよがりであつてはなりません、何処までも二にして一となる心を求めて行くのであります。

四、如来は慈父母なり

阿闍世王が父王を獄死せしめました、やがて大慚愧におち、耆婆大臣と亡き父の聲に導かれて釈尊をたずね、仏慈の平等にして更に差別なき御心に接し、「阿闍世のために涅槃に入らず」との大悲をうけて、信眼ここに開けての随喜讃仰の聲に、

如来は一切のために 常に慈父母となりたまえり、
まさに知るべし諸の衆生は 皆是れ如来の子なり。

世尊の大慈悲は 衆のために苦行を修したまうこと、人の鬼魅にくるわされて 狂乱して所為多きが如し。とあります。王はここに久遠の親を仏において発見したのであります。否、太陽の光で太陽を仰ぐように、仏心のかされて、信順の心をおこさせて下さるのであります。

この仏から頂く信こそ、道の元であり、功德の母体となるのであります。人生の黎明がはじまるのであります。祖聖はそこを

智慧の念仏することは 法蔵願力のなせるなり
信心の智慧なかりせば いかでか涅槃をさとらまし
とも、また、

弥陀釈迦の慈悲よりぞ 願作仏心はえしめたる
信心の智慧に入りてこそ 仏恩報する身とはなれ
とたたえられました。これと同時に、仏の智慧、衆生と一体化して下さる智慧を疑う者をいましめられて

仏智疑う罪深し この罪思ひ知るならば
悔いる心をむねとして仏智の不思議をたのむべし
と申されました。

六、むすび

親の智慧から仏の智慧を述べましたが、最近の日本は敗戦後の大変動により家族制度は廃棄され、同時に親とか孝ということもかえりみられない状態になりましたが、それではまたとない尊い宝を見失い、親は宝の持ち腐りとなり、子は帰るべきところを失うという悲惨さを感じるにつけて改めて親のみの持つ智慧を掲げた次第であります。

無窮に接して開かれた信眼によって知らされたのであります。

聖徳太子の廟前びやうくつの偈に「大慈大悲本弘誓、愍念衆生如一子」とありますように、仏と衆生は二にして一、一つにして二であります。もとより悪差別に曇らされた我等煩惱の眼には、仏と衆生とは飽くまでも二つで、一つにとけませぬが、仏心のまことにおいて、倦まずたゆまず二にして一つなる心が湧出して、へだて心をとろかして下さる、そこに仏の智慧は輝き、世間の生死の雲が照破されるのであります。

「生死の堺に、仏ましますれば生死なし」と讃えられるのであります。

五、信は道元・功德の母

信とはまことであります。我等煩惱のかたまりの身にはありえぬところであります。これひとえに仏よりたまわるころであります。聖徳太子の聖勝経義疏に、

「如来に調伏せられて、如来に帰依し
法の津沢を得て、信樂の心を生ず。」

とありますように、親を捨て、親を離れそむく身に、何処までも注がれる親心のまことに、たえず落ちる点滴の岩をも穿つに等しく、倦まずたゆまず働き続けて下さる願力の自然の結果、如何にしごとく、剛情な我等も遂に打ちま

人類三十何億の中で、私と一つになりきって下さるのは親と仏をのけて外にありません。私は六十三才になりましたが、今日のいのちが続いて来ましたうらには、原始時代から微塵のきれ目のないのちのつながり何千万、何億年と続いて来ました。その間、私のいのちの一つになつて護り、はぐくみ、そだてられたればこそ今日があります。それを貫く尊いひかり、それこそ親の持つ、親でなくてはあり得ぬ智慧のいのちであります。そのことを仏はあらゆる善巧方便をもって我等に信知させて下さるのであります。

パスカルの言葉

人間は天使でもなければ、禽獣でもない。生憎なことに天使ぶる人間が禽獣の真似をする。

天下第一の哲学者でも、身体よりもすこしばかり広い板にのつて、深淵に臨むならば、いくら理性的には一身の安全なことが解つていても、顔色が蒼ざめて、冷汗を流さずにはいられない。

正義が力を伴わない時は無能であり、力を伴えば圧制を行う。とに角正義が力と提携しないと反対を被る。これはつまり世間に悪人が絶えないからである。

わが懺悔の記 (二)

三 上 孝 基

かつて私の十六才の夏でしたが、当時膳所中学の二年で夏休みで帰省中の事でした。生意気にも、日頃昔人間で何も知らない、やゝ輕蔑の念すら抱いていた母に向って試みに「人間は何のためにこの世に生れて来たのだろう？」と質問しました。すると母が何気なくすぐ「そりゃお前、仏様に悟りを開かせて頂きに生れてきたのや、私はそう信じている」と当然のことのように答えました。この母の言葉に私はハッと打たれて恥ずかしくなりました。矢つ張り母は偉い、今まで母を軽く見させてすらいいた自分の思いあがった態度をひどく申し訳なく感じると同時に「成程そうだ安心して死ぬるように悟りを開くことが何より大事だ」と自分自身に云い聞かせました。正直なところこれまでに母の楽しそうな顔は一度も見ることがありません。毎朝早くから夜はおそくまで御堂の御給仕と庫裡の家事万端、又檀家の人々の応待から私ども六人の子供の世話、そのうえ気むずかしい父の気嫌とりまで、黙々として独りでやって

おり、ひと時も休んでおったことはありません。色々と心を使いとおして、自分というものを全くもっていないのではないか、何が楽しくて生きているのだろう。つまり母には人生の意義など全然無いのではないかというのが生意気な私の疑問でもあり、また母への日頃の同情でもあったのです。そこへこの「仏様に悟りを開かせていただくため」とハッキリした母の人生目標を聞いて、さすがに母である、母は十分人生の意義を認めて大きな目的と楽しみをもっているのだ、それで日常生活の楽しみや世間並の楽しみなどは問題にならないのだ。この語を聞いて私は、これまでも母に対して抱いていた同情は一変して尊敬の念となり、それ以来今日に至るまで、この母の一言が私の胸のうちに強く刻まれて、私自身の信念として生き続けて参りました。にも拘らず、今私は自分の死を眼前にひかえてあわてふためいています。かつての何気ない母の一言に、安心立命をうる事が人生最大の目標で、学問だ出世だといっても

これらはホンの五十年六十年の間のこと、何程の価値がある。名譽も財産も、どんなものを犠牲にしても是非安心立命を得たいと深い感動とともに心の底にきざみこんでいた。あれから約十年、気分の変遷し易い青年期とはいえ、ついウカウカと世間並の名利や一時的欲望に走って、人生の一大事に対する真剣な修養を忘れ、空虚な虚栄に誘われて無駄な歳月を過したことが今さら悔やまれてならない。ナゼもつと早く真剣に求道しなかったのか、もう今と云っては遅い、取り返しがつかぬ。絶望だ！絶望だ！と自暴自棄になる。しかしヤケになっても現実の死の恐怖は遁れられない。こうして追い詰められるとまた動悸が昇ぶって何が何やらわからなくなる。

母が私の苦悶の様子を見かねて不案内な東京の街を尋ねたずねて、本郷から前田慧雲先生を請じてきてくれた。しかし折角の先生の法話も私の差し迫った慌てふためいている身には全然受けつけません。次には私からの願いで、近角常観先生に来て頂きました。先生には高等学校以来、求道学会の日曜講話でたび／＼歎異抄のお話を聞いておりました。ところが先生のお話も、これまで聞いた通りの言葉の繰り返して、鎮痛剤ほどの効果もありません。先生は私が可哀想だとして実に熱心に、御自身の神経衰弱を患った時の入信の経過を細かく話して下さったそうで、特に傍聴し

ておられた医師が非常に感動を受けたと後日聞きました。

頭が混乱して、ただ焦っている当時の私にはサッパリ耳に入らなかつたというのが事実でした。かえって日頃先生の信仰生活にあこがれの念すらもっていた私には、先生ならという一縷の期待がはずれて落胆のあまり、その後二度目に訪ねて下さった時には、失礼にも先生にお会いすることすら拒んだぐらいでした。その時、私の内心の悲痛な声は「仏様のお慈悲をいくら説かれても、仏様そのものの存在が掴めぬではないか？肝心な仏様の存在を納得できるように示してもらいたい、どうしたら仏様がつかめるのだ」と血の出る思いで叫んでおりました。

このように死の不安や恐怖に苦しんでおりますうちに、病氣の方は日一日と快方に向つておつたらしく、入院以来およそ一ヶ月を経過していよいよ退院が申し渡されました。私には心の苦悶が即病氣なのですから一向に癒ってきたとはいえられません。むしろ一日一日と死が迫りつつあると信じきっている時に、急に退院を告げられたのですから、喜ぶどころか、何かペテンにかかったような、騙されたように感じて、例の邪推癖で、病院内で死なしては小橋家の名にかかわるから、医師達が計らって無理に退院させるのだとひとりぎめしておりました。母があらかじめ探しておいてくれた愛宕下の貸間へ人力車で行く途中、芝公園

の森を通りながら、これが東京の見納めであらうと思つて車の幌の空き間から早春の薄陽を浴びた樹々を眺めておりました。ここでは十日ばかり休んだのみで、やがて勧められて日本橋浜町の知人宅の一室を借りて移りました。

その頃はもう桜も盛りを過ぎて陽気もよくなった頃で、病後の身々母に付き添われて散歩するほどになっておりました。神経の亢奮も病院にいた時からみると余程おさまっております。しかし一日に数回は発作がおこつて、動悸が急に激しくなり眩暈がして、例の奈落に落ちこむような不安が襲つてきました。そんな時は近くの電柱などに掴つておさまるのを待つほかはありませんでした。或時ために近くの小さな寄席に入つてみましたが、二階席から今にも飛び降りそうな強迫観念に駆られて早々逃げ出しました。果物をむくナイフさえも恐怖のもとになりました。試みに書物を二、三頁拾ひ読みしてみますと、これまでに経験したことがないほど頭脳が冴えて、恐ろしいほど強い印象をうけ、グングンと著者の論旨に引き込まれて行きます。そしてどんな難解な書物でも理解できそうです。それがかえつてそれら恐ろしくて止めてしまいました。もう一度あの時のような鋭い能力がもたらと、これだけは今でも残り惜しく思います。

その頃の一日、天気も佳く気分も良かったので母と散歩

「よき心のおこるも宿善しゆくぜんのもよおす故なり、悪事のおもわれせらるるも悪業あくごふのはかろう故なり」

悪事を思つたりしたりするのは、すべて宿業のなすわざである。業力を抑えることは到底われわれにできることではない。兎の毛、羊の毛のさきにいる塵ばかりのことでも私自身にはどうすることもできない宿業の結果である。私の気がついて悩んでいる悪事くらいはまだ／＼僅かなもので、私が過去に犯し、またこれから後に犯す罪はどれ程多くかつ大きいのか、到底測り知ることが出来ない。将来どんな大それた罪を造るかも知れない悪業の数々を自分の身にすでに背負っているかも知れないのだ。そこを私は久遠の昔から見抜いておつて下さつて、この宿業の私を救つてやるといふ本願をお建て下さつた。最早私はあれこれと世俗的な道徳や義理に照らして、自分の悪事悪業を責めさいないで、告白するの、許しを乞うのと騒ぎまわる必要はないのだ。私の懺悔告白は、仏様が私の気付かぬ罪や、将来造る罪まで見透して居て下さるから、今更に人の前で告白する必要はなく、罪の許しは、許しどころか、仏様が赤児同様一寸先もわからず重い業を負っている私を、可哀想で見捨ておけない、必ず済つてやると仰言っている。これ以上何を言うべきか、ただ「ありがとうございます」と申すより他に言葉はありません。ここに初めて私の心底に仏のお

しているうちにフト急に九段の靖国神社にお参りしたくなつて病後初めて電車に乗りました、それが本当の動機だったかも知れません。病後の私は寝間着姿にも等しい身なりですし、母も二月始めに看病のため急に上京しましたのでホンの当座の身の回りの用意だけでしたので四月というのに冬着をしていました。それでも病人の氣力の恢復が嬉しくて喜んで同意してくれました。その九段の仏教会館で丁度土曜日だったので、近角先生の講話の看板が出ておりました。近角先生には、入院中二度も訪ねていただいたのに、亢奮しておる最中でただ解らん／＼とロクロク先生のお話に耳を傾けようとしなかったこともあるので、余程関が高くなりくかつたのですが、何となくこのまま行き過ぎしてしまうことが出来ず、思い切って母を促して入りました。会館は五十畳敷くらいの室で三十名ばかりの聴衆が居り先生のお話が始まろうとするところでした。私は先生の前に出るのが何だか面はゆいので、後の方に母と並んで坐りました。その時のお話は歎異抄の第三章、悪人正機の条で「善人なおもて往生をとぐ、いわんや悪人をや」いつも耳なれしたことができる程変りばえのないお話なのですが、その日に限つて特別に耳新しく感銘が深いのです。先生のお話が一語一語生きていて不思議なほど私の胸に吸いついて強い印象を与えます。

慈悲が徹到しました。入院中あれほど苦しみ悩んだ私の罪惡感がここで始めて解決されました。母に、医師に私の罪の深さを如実に理解して貰うために、どうしても適当な言葉や表現が見出せないで困り悶えたことが、今は夢のように現実ばなれして感ぜられます。所詮人間同志では何ともしてみよふのない問題だったのです。

あの時私が必死になつて求めたのは、まさしくこの仏の慈悲だったのです。いくら懺悔し告白しようとしてもきれない私を底の底まで見透し理解して頂くのは仏の無碍光の智慧の外にはなかったのです。しかもこの罪深い私を護り救うて下さる大悲のおこころを知らされ急に陽光に照らされた心地でした。

これまで永い間仏の存在ということにこだわつて、何か奇蹟的にでも仏を見るなり、感ずるなりして、シツカリと掴まないと信じられないように思っていました。いくら法話や仏書で理づめに考えても納得できないので苦しんできました。ところが仏の慈悲が徹到しますと、仏の存在などということとは頭に浮んでもきません、そんな余地はないのです。強いて言えば、お慈悲と仏様とは一つで、仏様が先ず存在してお慈悲が生れたのではない、御慈悲即仏であります。私が長い間さがし求めており、今度の病氣で行き詰まつて、血を吐く思いで求めたのも、他ならぬこの慈悲だ

ったのです。お慈悲なしでは永久に私の苦悩は続いたでしょう、お慈悲は私には最も必要な、無くてはならぬもの、つまり価値的存在であります。そこで若し私の存在はと問われたら、私は、仏様は普通の存在として感覚的に経験出来る存在の実在ではなく、無くては私が生きて行けぬ価値的実在であると申したらいでしょう。それは私も仏教徒が因果律の存在や来世の存在を信じているのと同様であります。

過日前田先生が病院に来て下さった時仰言った「私は自分が作るものだ」という一言の意味がよくわかりました。自分が作るなどというと、いかにも自力めいて眞実信徒の方からは叱られるかも知れませんが、自分で発見すると申してもよいでしょう。無ければ私は生きて行けないから、生きるためには、無ければ自分で見出すほかはない、しかもそれは久遠劫の過去から存在したのですが、私の眼には見えなかった。この度の病気が機縁となって、ヤット眼が開けて私のものになったということであります。

近角先生のお話を聴きながら涙がこぼれて仕様がありません。女々しいようで、今さらながら先生に対して恥かしい思いがして正視出来ません、隣に坐っている母にも気付かれたくない。私の顔の筋肉が知らず知らずゆるんで、腹の底から微笑がこみあげて参ります。抑えても／＼顔がく

私はその時は何も気付きませんでした。電車もない深夜に未知の東京の街を、本郷の大学前から日本橋の両国近くまで数里の道をただひとりお念仏を道伴れに歩いて帰った母の姿が眼に見えるようです。

○

これから後は、その後の私の信後の心境について申し述べます。
仏様のお慈悲に目覚めさせて頂いた当座は、病気が恢復したということもあって、何となく周囲のすべてが新らしく、大げさに言えば、生まれ更った感じがいたしました。何より喜ばしいことは私の長らく憧れながらどうしても近づき得なかった信仰生活、そこには仏の實在の確證という取りつきようなない障壁が厳然と立ち塞がっておったのですが、その壁が機が熟して——というよりほかに表現の仕様がありません——消滅し、それに連れてこれまでの私の悪い習癖、性癖として断えず悩み続けてきたコンプレックスが解消したことです。勿論長い間——私のこれまでの生涯の大事を占めて落ちこんでいった泥沼の悪臭は、私の習性となり性格となつて一朝一夕、いな恐らく終生変らないかも知れませんが、それらがいわば根無し草と化してしまつて、少なくとも私自身余りにこれにこだわり心を勞する必要がなくなったことは有り難いと思います。内攻性で極度に自閉的

ずれて何とも仕様がなない。帰りの電車の中でも、思い出すと頬がゆるんで笑顔が止まらない、人々が馬鹿と思いはしないかと気になる。母はどうやら私の急な変わり方に気付いて心配してくれている様子です。気でも違つたのかと疑っているのかも知れないので母の心配を解くため小さい声で「お慈悲がはじめてわかった、嬉しい」と独り言のように申しました。母から「よかったなあ」と共に喜んでくれると期待しておりましたのに、母は一言もいわず、反つて顔は青ざめて、私の眼を避けているかの様子です。気分でも悪いのかと今度は私が心配する番になりました。

これは後になって近角先生から伺つてはじめて知りましたが、母は私が急にお慈悲に目覚めて喜んでゐるのに、自分は何十年という長い間聞法しながら、まだそんなきわ立つて喜びを味つたことがないのは、信仰が得られてないのか、聞き方が間違っているかに相違ない、これは一大事であると母自身があわて出したのです。宿に帰つても気が落ちつかず、とうとうその夜、私が寝てから宿を出て近角先生をお訪ねして徹夜で先生からお話を伺ひ疑問を晴らして頂いたということです。恐らく母はその時必死の気持で深夜にもかかわらず、先生の門を叩いたことと思われま

翌朝そんなことは露知らぬ私が、気持よく目覚めました時には、いつもの通り私の世話をしてくれましたので、

であつた私は、唯今では周囲の人々からは何等変わつておらぬように見られるでしょうが、そのような自分を私自身憎み、悩み煩うことがなくなったことは、私にとつてまことに気が楽になり安らかになりました。少なくとも人々の間に伍して他人の私に対する気持を気にしてたえず神経を張りつめてゐるような余祐のない生活から通れられたことは何より嬉しいことです。

三ヶ月近くも郷里に父と幼い弟妹を残して、代りを許さない寺院の坊守としての役目を離れて、私の看護にかかりきつてくれた母も、四月中旬に漸く帰郷しました。私は希望通り近角先生のお許しを得て求道学舎に入れて頂き、朝夕先生の膝下で同じような縁故の友人達と共に生活するようになりました。大学二年の一学期で、同窓生達は既に卒業論文の準備にかかつておりました。遅ればせながら私も今度の経験から関心を持つようになった「業感縁起論」に関する主題を選んで木村泰賢教授の指導を仰ぐことに致しました。業思想の起源を印度哲学中に探索してみてはとの教授のヒントを得てフラーフマアの百足論の英訳本八冊を研究室に購入して貰つて、字書と首びきて勉強を始めました。卒論提出まで一年足らずですから六月から始まる夏休みにも帰省せず、求道学舎の破れ畳の上で汗をふきふき勉強したのは愉しい思い出です。

学舎の友人に独法二年の植野明君が居ました。同君はかねてから一高德風会（近角先生を中心に週一回歎異抄の講話を聞く一高生有志の会）の熱心な会員で、私より先に入舎しており、先生の門下で私の先輩でした。ある時、入信後の朗らかなになった胸中を言い現わすのに適当な言葉が見当らず、つい「悪いことが平気で出来るようになった」というと、植野君もわが意を得たりと言わんばかりに、その通りだと賛成して、二人で大笑いしたことがありました。まことに大それた、歎異抄にいわれる「本願ほこり」で、危険な誤解され易い表現ですが、この頃の気持を現わすにはこういうよりほかなかったのです。

然し、正直なところ、このような信仰による発揚状態は長く続きませんでした。日々の生活が病氣前の状態に復帰するとともに、一時的の感激の情が漸次薄れて、過去三ヶ月の異常であった経験や出来事が、夢の間のことのように影がぼやけてきて、それがこの上なく残念で、もう一度當時の感激に浸りたいと願いましたが、所詮それは駄目でした。無理に憶いおこしても、当初のような感動を呼び起こすことは不可能でした。

すると、仏のお慈悲までが一種の精神の興奮状態の結果の幻想であったような感がしてたよりないみじめな心境に陥ることすらありました。これも畢竟興奮発揚状態に次ぐ

無理に取り上げようとするとなお一層離しません、手頃な玩具を出すや危い刃物を捨てて直ぐ玩具を取ります。お慈悲というどんなものにも優る宝物を貰った以上、他のどんな名誉も財産も、はた恥や失敗も、執着し拘泥する必要がなくなるのです。愛児を亡くするとか、災難で一夜に全財産を失うとか、あるいは自分の至らぬために罪科に問われて、名誉も信用も一時に失うとか、人生には様々な不幸や苦難が数限りなく起こりますが、その不幸から受ける辛い情には変りはありませんが、お慈悲という宝のあるなしで苦痛が和らげられ慰められると否との違いが生ずるのです。生涯を賭けて努力してきた事業が一朝にして破滅するとかわが身のみならず一族友人をまで自分の罪の巻き添えにするとかの悲境に陥った場合、小心の人なら或は自殺してその苦痛から逃避しようとするでしょう。若しもお慈悲に目覚めたなら、逃避の代りに、光風霽月とまでは脱俗できなくても、静かに苦難に耐えて、反ってお慈悲を一層喜ぶ心境がおのずから開けてくると思います。

お慈悲のおかげで生活態度に一種の余裕が生じると申しますか。元来私は自己意識が強く、幼い時から自分の弱点を他人に見られたり指適されたりすることが何より怖ろしく、無意識に表面をつくろって人に接するという嫌な習癖があつて、常に飽き足らなく自己嫌惡にかられて、はては

反動期であつたと言えましょう。海面はどんなに変化しても海底深く経験された回心にもとずく基盤からの湧き水は事により折にふれて心の均衡をとり戻すのに変らぬ力を供給してくれまふ。この湧き水の通りをよくするために、いわゆる行住坐臥の念仏が大切であることをしみじみ感じながら怠り勝ちよりむしろ忘れ勝ちであることは、お恥しい次第であります。朝、お内仏で誦する偈文の僅か四、五分のお勤めすら怠ることすらあるという、浅ましい限りの生活を繰り返して居るのが、私の今日の現実です。忘恩と云えばこれほど甚しいものはありますまい。

それでも有り難いことに、以前と違って気軽に捨て身になれることです。何か事にブツかった時に、我執に捉われて表を糊塗することに苦勞したり、瘦我慢して面子にこだわったりすることが幾分少なくなったことは、陰には慈悲の裏付けがあるからこそであります。

先年私のやっている施設（乳児院）の職員が、あるイデオロギーに色づけられた団体の煽動によって組合を作つてストを敢行しようとした時、しばしばその道の古強者たち（古強者）に囲まれて、いわゆる吊し上げに逢つた時など、以前の私だったら周章狼狽したことと思いますが、そんな事もなく支障も来たさす切り抜けられたことは、お慈悲の力でありまふ。赤ン坊が危い刃物を持って手離さない時、あわてて

これが劣等感となり罪惡感の源泉となつておりました。信後はこの点に著しい変化がおこり、こんな苦しい思いは殆んど消えて、大変楽な気持ちになりました。残念ながら私には自分の性格が変わったとか良くなったとかいう自覚は毛頭ありません。これにはもつとたゆまぬ努力と精進が必要でしょう。ただ私の経験し自覚しているところは、自分の足りない点、弱いところに思い煩う気持ち、優柔不断を改めたくてどうにもならぬ苦しさ、そんなものから解放されたという事です。私は信仰によって急に鉛が銀に変わるというものではなく、鉛は鉛なりに鉛の特長を発揮して安定した生活を送るようになるものと思います。ここに他力信仰の妙味があるのではないのでしょうか？

以上私の信仰に関するささやかな経験を述べて先覚各位のご批判とご叱正を仰ぎたいと念願する次第であります。前述のように私の信後の懈怠は実にお恥しながら慚愧に堪えません。仏前のお勤め時の他は念仏の声が出ないのが私の今日の生活であります。



二河喩と天路歷程

福 島 政 雄

常観先生が二河白道のお話をなされました時に、西洋では天路歷程という話があると仰言ったことがあります。此の天路歷程というのは英国十七世紀の人ジョン・バンヤンというのが書き残したものでありまして、キリスト教の信仰の歷程を比喩的に書かれたものであります。バンヤンには不良の非行少年であつて村中のきらわれ者であつたといふことでもあります。尤も不良ではあつても一風ちがつた性質で、「酒も嗜まず、色に溺れず」といふ風であつたと云われます。十七歳で国民軍に入りましたけれども戦争に出ることは免れ、やがて妻を迎えたといふことです。悪に強きは善にも強しと言われますが、彼は自分で決心して断然悪を捨てて善に移ることを決しました。それは彼自らの言によれば「溢れる恩寵」によつて決心したといふことでもあります。村人はびっくりしてかえつてその成行を危んだといふことでもあります、彼はますます進んで信を

深くし、救主キリストを認めて立派な信者となり、二十五歳でバプテスト教会に加入して、後にその牧師となり、信仰上の幾多の経験を経て最も有力な説教者となりました。併しその信仰が進めば進むほど、迫害は到る処に待つていふという有様でありました。

その後五六年の間に妻が四人の子供を残して世を去り、エリザベツという年が若くて賢い後妻を迎えました、信仰はいよいよ奥義に達し、その名を遠近に知られました。然るにバンヤンが三十二歳の時、英国には王政復古といふ大事変がありました。これは先の英王チャールス一世が革命の手に首をはねられ、次いでクロムエルを首領といただいた共和政治も血腥い一場の夢と過ぎまして、天下は再びチャールス二世の専政の代となつたといふ出来事でありました。此の時最も困難を感じたのは新教すなわちプロテスタントの説教者であります。それはカトリックではローマ法王を教会の首長とし、英国の国教では英国王を教会の首長

としていたのに、主キリストの外にいただくべき首長はないと信じたプロテスタントの人々は二重の迫害を受けるようになったのであります。それでバンヤンのような狂熱的説教者が無事である筈がありません。やがて捕えられ厳しく国法に問われて遂にベットフォードの牢獄に入れられ、いたましい囚人として十二年の春秋を獄中に送ることとなりました。

此の間に最も深くバンヤンの心を痛めたのはたよりない家族のことでありました。かよい妻と四人の子供、その中で最愛の娘は盲目でありました。此の盲目の少女は毎日の手に引かれて父をその牢獄にたずねました。バンヤンは実に断腸の思い、併し主義は枉げられません。「バンヤンよ汝が妻子に対する真情があるならば、此の牢獄から出してやつても宜しいが、ただ至尊の陛下に不敬を致して説教しないと誓え」といふのを聞くと、彼は忽ち大なる眼を開いて、「否、今日解き放たれたならば、明日必ず説法する」と言い張りました。

天路歷程は此の悲風慘雨の十二年間に書かれたものであります。獄中に筆を起し獄中に稿を収めたものであります。併し彼の晩年はむしろ幸福であつたと云われます。出獄後十七年、六十一歳で世を去り、パンヒルの墓地に静かに眠るようになりました。

天路歷程の古い邦訳としては池享吉氏の訳があります。今ここに書きましたバンヤンの生涯は池氏の緒言によつたものであります。池氏はその訳文の一程毎に次の歌を最初に入れて居られます。

世を渡る旅のあれ野の明け暮れに

天つみその春をしを思ふ

今は岩波文庫の竹友藻風氏の新しい訳がありますからそれによつて歷程の要点を述べます。

天路歷程は夢の中で見た事となつていて、その発端の言葉は次の通りであります。

この世の荒野を歩いてゐる時、とある穴窟のあるところにさしかかり、そこに身を横たえて眠つた。眠っているうちに夢を見た。その夢の中で見ると、ぼろを纏うた一人の男が、顔をその家からそむけ、手に一巻の書物を持ち、背中には大きな荷物を負うて、とある場所に立っていた。私は眺めた、彼が書物を開いてそれを読んでいるのを見た。読みながら彼は泣き、かつおののいた。とうとう堪えられなくなり、悲しげな声で叫び出した。「どうしたらいいだろう」と言いながら。

此の穴窟というのは十二年の牢獄であります。十二年の夢、此の夢の中の男が天国への旅をするので、その手に持つてゐるのは聖書、その背中に負うてゐるのは罪の重荷で

あります。此の男の名はクリスチアンと云い、天国への旅を勧めるのはエヴァンジェリストであります。むこうに輝く光の方へ向って行けとエヴァンジェリストはクリスチアンに勧めるのであります。そこに二三の人が来て思いとまらせようとしたり、一緒になったりしますが、先ず大野の中にぬかるみの深い落胆の沼というのに落ち込んで苦しみ、ヘルプという人に助けられて更に旅を続けます。元来此の旅は「滅亡の市」をのがれ出でて清明歡樂の天国へと向うのでありますが、その途中で色々誘惑や苦難に出会うのであります。世智聰明と云われる人間から欺かれて「道徳」という村に遵法氏という人を訪ねようとしておそろしく高い山が頭の上に落ちかかるうとして見るのを見て、恐れて引きかえすこともあります。正しい道に帰ってエヴァンジェリストからまた教えられてようやく光さず門に行き、「叩けよ、さらばそは汝に開かれん」と書かれてあるのを見て、その窄き門を叩いて中に入れられます。そして正しい道は真直であってまた窄いと教えられます。次にクリストのことを説明せられ、情慾のおそろしさを教えられなどして救の壁を通りぬけ、十字架の立っているところまで行った時クリスチャンの背の重荷はするすると落ちて消えてしまいます。そこでクリスチャンは天国へ入る証明書のようなものを与えられ、勇んで更に進んで行き

ますが、途中氣持のよい四阿で眠ってその証明書を置き忘れたりして、あとで氣がついて泣いてあとがえりすることがあります。アボルオンという悪魔と戦って辛うじて勝つところがあり、おそろしい死の影の谷を行く時はすっかり心を取り乱したりしたけれども、神は共にいますという心持から救われるというところもあります。そして結局光につつまれて谷の果まで行きました。それから虚榮の市を通り裁判を受けたりする場面もあります。以上は飛び／＼に歷程の中の幾つかの場面を少しばかり述べたに過ぎません。委しいことは面倒で書けません。ただ感じますことは天路歷程が一種の面白い物語とも見られるということであり、これを読んで自分の問題を考うべきであり、それがなかなかむつかしいと思うのであります。次に二河喻のことを考えて見ます。これは善導大師が書き残されたものであります。人が西に向かつて行こうとするのに、その前程百千里あると先ず云われています。此の百千里というのは色々に考えられましようが、広遠な理想とか希望とかいうことであるとも考えられると思います。人間は青年期には広遠な希望や理想を持つものであります。併し人生現実の一步を踏み出して見ますと、その希望や理想を裏ざられることが次々に現れて来ます。そして深

い教に接して反省しますれば、自分が思いもよらなかった人生現実の淋しさが感ぜられて来ます。「此の人既に空曠のはるかなる処に至るに更に人物なし」とあるのは人生の淋しさの最初の感じではありませんでしょうか。聖書には我笛吹けども汝等おどらずとあります。これも深い心持から人生孤独の心持を述べたのではないのでしょうか。人生の淋しさに氣がついて来れば、自分の姿に心をひそめるようになります。ここに水火の二河が感ぜられます。それは貪瞋の二河であります。此の二河が見えて来れば、自分の理想というものは実に二河の上に架けられてある四五寸の白道である。危いものであると感ずるようになります。渡るに渡られませんか。しかも自分の身心から出て来る百八の煩惱は猛獸毒蛇のようにおそろしく迫って来ます。而して後方から追いかけて来るものは群賊のようであり自分の命が取られるのではないかとおそろしくなります。こうな

時、いのちの底にひびく声であって、釈尊の声と弥陀尊の声であると云われています。此の世における真実そのものの呼び声のひびきであります。

って来れば火の河、水の河の中へ入るつもりで四五寸と見られる白道の上にふみ込むより外はありません。此の決心はなかなか出来かねます。然るに此の時自分のいのちの底までひびく声がきこえます。「汝決定して此の道を尋ねて行け、必ず死の難無からん」という声、それと同時に「汝一心正念にして直に來れ我れ能く汝を護らん」という声が真正面からきこえて来ます。これは絶体絶命の

て来て永遠の問題に目がさめたということではないでしょうか。貪瞋二河は自分から離れたものではありません。いわば自分の命から吹き出ているものであります。二つの声は自分の姿に目ざめて歩みを進めよという真実の教えのひびきではありませんでしょうか。それで四五寸の白道の上を綱渡りするようにして歩んで行くのではありません。決心して白道と見えた上に歩を移せば、自分の足は水火の河の底についているのであります。否水火そのものは自分の体から吹き出ているものであります。貪瞋の煩惱を自覺してふみ込んだ者には、その行く道は担々たる大道であります。二尊の呼び声がひびいている大道であります。祖師聖人はこれを大般涅槃無上の大道と云われます。自覺の上にその大道を闊歩するのであります。

此のようになれば後方から来た群賊と思われた人々は実は群賊ではないということになります。それは別解、悪見の人と言われていますけれども皆我が姿を鏡にうつして見せて下さる善知識であります。一切の聖賢の教はそのまますまを真面目に実行しようとする人にとっては決死の覚悟

を要する教であります。忠孝両全が出来ないという歎きは重盛一人の歎きではありません。真面目に忠孝両全の道を行こうとすれば、結局死ぬるより外はありません。聖賢の教というものは吾々が少しの親切も徹底出来ないという姿を見せて下さる鏡であります。また悪見の人でも我々の姿を見せる鏡であります。その不真実な吾々にどこまでも真実のいのちを注いで下さる大慈悲に生かされて吾々は大般涅槃無上の大道を歩んで行くのであります。これが二河喻の教であります。

此の二河喻は「たとえ」というけれども実は「たとえ」ではない、人生の現実そのものであると常観先生が仰言ったことがあります。実際その通りだと思えます。宗教的自覚の上から此の人生の大道を歩む姿そのものを二河喻は説いてあるのであります。自分の問題であるという感じではありません。これに比ぶれば天路歷程は切実な生活の自覚を呼び起こすというよりもむしろ物語を読んでいるというようない感じがあります。途中クリスチャンと交渉する人間の数が多いに多く、それはこの人生の色々の面をうつし出したものではありますけれども、全体の求心の一路を説くためにはあまりに道具立てが多すぎるように思われます。

二河喻では此の人生の一路を歩む貪瞋の塊ともいうべき人間に励ましがあつて慈悲の光が徹しています。人生百年須

間にか数日を過され、ふと驚かされて耳をそばだつれば、「進み行くことが出来る、今や到る處障礙はない」と告げ給う声がきこえたということでもあります。それから勇み立って晋陽の九品道場に行き道綽禪師の温容に接して禪師から無量寿經二巻を授けられ、此の經説に随つて正観を遂げたいと決心され、七日の間三昧に入られたと承つて居ります。非常に熱烈な求道の人であり、八十歳を超えられた道綽禪師は此の若い弟子に御自分の日頃の罪過を聞かせてもらおうとせられたということでもあります。何とも云えない尊い師弟の關係であります。

此のような熱烈な善導大師が遺された著述の中で観無量寿經の御註釈、すなわち觀經疏の中で散善義というものが私どもの心打たれる大切なものであり、註釈書の中でこのように熱烈なものは世界に二つとないと言われています。此の散善義の中に二河白道の喻はあるのであります。

此の二河喻より前に至誠心積のところでは大師は痛烈に我々の心の有様を述べられています。たとい身心を苦しめ励まして日夜十二時に急に走り急に作すこと頭燃をはらうようにしてもすべて雑毒の善と名づける。此の雑毒の行を廻して彼の仏の浄土に生れたいと思つても不可であると言われます。

それから深心積のところでは二種深心を述べられています。

奥にして西岸の浄土に達するといふのでありますけれども、大切なことは東岸からの励ましにより、西岸からの慈光によって力づけられて、此の人生において大般涅槃無上の大道を行くことでもあります。天路歷程のクリスチャンが行き着くところは、「都は太陽のように輝き、街は黄金をもつて鋪かれ」とありますが、二河の行者の行き着くところは善友相迎える深い精神の世界であります。クリスチャンは憧憬の心が彼を導いて行くようでありますが、二河の行者には憧憬の心は無く、弥陀の心光を受けてしみじみと有りがたく人生の一步一步を辿るのであります。

要するに天路歷程は求道の上の細かな注意を受けるといふ点で参考になるというように私は感じます。二河喻は短くて切実で直に私の全生命の問題をつきつけられる感じがあります。どちらからも深く教えられます。

なおここに善導大師のことを少しく述べて見たいと思います。

大師は熱烈な求道者であります。バンヤンのように牢獄に入れられたといふことはありません。貞観十五年、二十九歳の善導大師が八十歳の道綽禪師を訪れたのははるばるの途中死を覚悟して参られたのであります。途中風が強く旅の疲れに行き悩み、木の葉の積った坑に身を入れて、その坑の中で一心不乱に念仏して居られて、いつの

す。一には決定して深く信ず。自身は現に是れ罪惡生死の凡夫、曠劫より以来常に没し常に流転して出離の縁あることなしとす。二には決定して深く信ず、彼の阿弥陀仏の四十八願は衆生を攝受し疑いなく慮りなく彼の願力に乗じて定めて往生を得と又決定して信ず。

大師の説法はまた非常に熱烈に浄土を説かれましたので、その熱に打たれて心が変になつて木に登つて飛び降りて自殺したものがあるとも伝えられています。これは伝説であるかも知れませんが大師が熱烈な方であつたことを物語語るものでありましょう。兎に角二河喻は此の精神から産み出されたものであり、それ故に我々にせまるものがあるのであります。以上粗雑ながら大師の片影を述べて此の稿を終ることに致します。

(昭和四十二年一月十八日稿了)

バスカルの言葉

人間は中間的存在で、その理性の力も中間的なものにすぎない。たとえば音響にしてもあまり高すぎてもきこえずあまり強い光は眼を眩ますにとどまる。

理性が自己の微力を認めたときに、はじめて理性は自己の本務を全うし得るのである。そして理性には到底理解できない感情の立場のあることを認めなければならない。

あ と が き



春の彼岸が参りました、草も木も、人も小鳥も、陽光を浴びて嬉々としております。しかし目を外に転じます時、中共の革命運動、ベトナムの泥沼の戦争、等々きびしい動きが日々報じられます。

さて、かえりみます時、敗戦直後の混乱期、たのみにする人を失い、家は焼かれ、衣に食に住に右往左往した時、むしろ真剣なものが肌に感じられましたが、二十年の春秋が過ぎ、日本としては稀な長い平和の年を送り、経済的に成長しました今日、本当の人間性を喪失されるやに思われてなりません。そこに実存哲学に走って、人間実存の姿を求める人々もあります。

この時、近角先生の「夢幻の人生と真実の如来」の教は徹底してそうした迷路から導き出して下さるものであります。

「二河喩と天路歷程」の福島先生の御文は仏教とキリスト教の求道物語を指摘して下さりながら、二河喩の特長を明示して下さいました。福島先生は数年前、華嚴經の善財求道物語を講じて下さいましたが、これも併せてお読み頂きたいと思います。柳瀬様の「随想断片」は、短歌草原誌の巻頭言から頂きました。信の大地に常立たれての歌心を教えますことであります。

三上様の「わが懺悔の記」は古稀をすぎられて半生を思い浮べられながら、悲喜の一切を打ち明けて下さいました。御自身にも仰言っておりますように強いノイローゼの苦悩を持たれたのであります。その苦悩を縁として仏道を聞きとられましたことはまことに尊い記録であります。一度あつてくりかえしのつかない人生の実録は、尊いバイブルに相当すると西哲は申しましたが、その中に仏のみ声を聞きとらせて頂きましょう。

「親の智慧」の拙稿は、最近、親という存在が、子からも親からも見失われようとしている感がいたします。尊い智慧の親の胸に宿ることを申上げ、この心を大きく強くしたかな光と仰ぎたい願いからであります。

御 案 内

○ 第一、二、三日曜午後一時半、南区駄上町二ノ八八。一道会例会。市電・新郊通一丁目下車、東へ三筋目、左入ル。

○ 廿四日午前・午后、昭和区小椋町、教西寺、法話会。

定価 半年 二百円(送共)
一年 四百円(送共)

名古屋市南区駄上町二ノ八八
編集・発行人 花田 正 夫

電話八二二局七〇三七番

愛知県西加茂郡三好町大字福谷
印刷 入 本 田 政 雄

名古屋市南区駄上町二ノ八八

発行所 慈 光 社

振替口座名古屋一〇四七〇番